本領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

大正十四年七月一日第三種郵便物認可
大正十四年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光　明　第七卷第十一號　（定價金拾錢）

大正十四年七月一日第三種郵便物認可
大正十四年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第七卷　第十一號

◉一口有難いと云はせて下さいませ。

◉一口有難いと云つて下さいませ。

◉次ぎから次ぎと「有難い」を傳へて下さい。

大日本眞宗
光明園本部發行

❖合掌宣言❖

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生きたまふみ親。罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひたまふ。

第三、恵まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生。

第五、『四海の信心の人は皆兄弟。』其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

❖念願❖

一。自信教人信。自分ばかりが喜んでゐないで緣のつながる隣人に、一味の法悅を分ちたい。

一。報謝。ご恩づくめの中に生きてゐることに感激して、身を粉にしてゞも報謝の生活が營みたい。

一。俗諦。無明の醉のさめぬに重ねて毒酒をすゝめぬやうに。教育勅語戊申詔書の聖旨にかなふ忠良な國民となりたい。

一。向上。一生の間、知識先輩のみ教に聞き、念佛三昧信仰生活の向上を計りたい

一。提携。外への戰ひの爲めでなくて、自身教化耕養のために、確乎たる團結提携を期したい。

お願ひ

一。どうか皆樣の御同情で同胞を紹介して下さい。雜誌の讀者を一人でも造つて下さい。

一。誰かに光明が見せたいと思つて下さる方があれば御厄介ですが、はがきに姓名と住所とを書いて送つて下さい。殘本を送ります。

一。雜誌代の出ない時は其旨を御通知下されば唯で差上げます。

巻頭の叫び

おゝそれが生きておるのか。そも〳〵死んでゐるのか。

草も太る木ものびる。寒い〳〵冬の日でさへ、堅い〳〵年輪をつくるではないか。

汝は一体精神的にどれだけのんだか。

春の日のやうな順境には、安價なる享樂の夢に陶醉し、冬の日のやうな逆境には、忍辱、精進の力も失つて呪ひの死の生存を續ける。

生きてゐるなら覺めよ。覺めてゐるなら求めよ。求めて立ちあがらないならば、汝に永遠の道はとざされてある。

廻向の御名

住岡狂風

私は今生きてゐる

『私は今生きてゐる』

ぢつと目をつぶつて深く冥想する。心の底から何かしら力強く叫ぶ。

『私は今生きてゐる』

それだけ、やつとつぶやいた時、私の全靈は感激にうちふるい、沈みきつた心の底には無限の涙が湧き出でる。

『私は今生きてゐる』

それは斷じて、浮いた心持でもない。安價に感謝した心地でもない。無限の寂しさの中に雄々しくもこみあげて來る血の叫び聲である。

『私は今生きてゐる』

このたつた一つの事を忘れてゐるならば、道德だ、哲學だ、宗敎だ、藝術だと云つたところで、職業、貧富、貴賤、夫婦、兄弟、親子、家庭、社會、國家世界、そんなことを云つて騷いだところで、それは何にもならぬ概念の遊戯であり、乾からびた砂原のやうな死の世界、幽靈の世界の幻にすぎぬのだ。

『私は今生きてゐる』

おい同胞！私の愛する兄弟たち、もう一度眼をつぶつて考へて見やうではないか。一念此處に思ひ至る時、萬物は皆生きてゐるではないか。私が生きてゐないで何處に『苦』があらふ。苦がなくてどうして樂があらふ。宗敎もない。道德もない。藝術もない。『私は今生きてゐる。』この涙ぐましい感激の眞唯中にこそ、全ての人生が生れ出づる無量の聲が聞えるではないか。

敎育

人は全て金持になれば幸福を感謝し、食にも困るほど貧しければ、其不幸を呪ふものである。幸福に出會つて感謝し、不幸に遭遇しては悲しむ人の子には其處に種々なる敎育がある。感謝せよといふ敎へがある。富めば富んで感謝し貧しければ貧しくて感謝する。病氣を感謝し、衣食に感謝し、子に死別れて感謝し、火事にあつて感謝する。生活の一切をあげて感謝せよとの敎へである。

然し考へて見ねばならぬ。それが果して行詰りの出來ない日暮しだらふか。

子供が生れて喜んだ者は、子供を失つては泣かねばならぬ。富むことを感謝してゐたものは、貧しくなれば呪ふのが當然である。一家が全部達者であることに幸福を感じてゐた者は、病魔におそはれた時は暗い一家になるのも當然である。

一度や二度は、不幸に出會つても、神の試練、佛の御はからひ、御催促だと感謝もしやう。けれどもそれが末通つた道であらふか。私の生活相そのものを感謝の種に見て行かうとする敎へは、遂には私を躓づかせるのである。

幸福であることを感謝せよとも云はぬ。不幸の身を感謝せよとも云はぬ。そんな常識的な世界を去つて、もつと深い世界をのぞいて見やう。

私どもは、唯ぼんやりと感謝の霧の中に自分を僞つてもならぬ。眞實の價値を見失ふて、永遠のさまよひに沈んでもならぬ。

『私は今生きてゐる』

このたつた一つの事實を出發點にして、深刻な反省と考察を加へつゝ、靜かに、如來の生命にふれさせて貰はふ。

宿業力

見てごらんなさい。人間の住むところ其處には、冷き監獄と裁判所と、嚴しい警察が設けられて、國費が此處に費され國民の血潮はここに消費されてゐます。人々は如何にしたら、この呪はしい監獄と裁判所と警察とをなくすることが出來るかと研究し、努力してゐます。しかし人類の歷史があつて以來、大正の今日まで、嚴しくこそなれ、さうしたものが地上からなくなつた時があつ

たでせうか。人々はこれについて考へては見ないのでせうか。一体其れは何處に其根本原因があるのでせうか。自分を見つめて生きる私どもはおそろしいことを見出してしまつたのです。私の心の中を見つめます。見よ。私の心の中にこそ、あらゆるおそろしいものを持つてゐるではありませんか。殺人、放火、強盗、窃盗、強姦、詐欺、あらゆる犯罪の根本は皆私のうちにあるのでありました。『虚偽を云つてはならぬ。』それは如何に古臭いと云つても、守らねばならぬ道であります。しかるに、私のうちには平氣で虚偽を云ふ心があります。そも〳〵、この世界がかくまで、虚偽の世界になつた原因をば他に見出すことは出來ないのであります。私のこの虚言一つ平氣で云ひ得る心、その心こそ、かくまで人類が『そらごとたはごと』であることの根本原因であります。人々は、

新聞の三面記事の毎日なくならないのを見て、眉をひそめて、さも嫌らしさうに『仕方のない奴どもがゐるから國家が汚れるのだ。』とさも聖者にでもなつたらしく申します。青木月斗氏の奥さんが澤山な子供の母であり、責任ある家庭の主婦であり、俳壇の權威月斗先生の夫人であることをも顧ず、一書生と北海道に走つたのを見た時、世人は、皆高い世界から下界をでも見下すやうに、貞操論を持出したり、世道人心の腐敗したことを慨歎してゐました。『妻たる者が……』『母たるものが』とあらゆる批難の聲をそれにむけるのでありました。勿論私とても、決してあんな事件をよろこぶ者ではないのであります。一倍まさつてさうした事件が後から後から出て來ることに悲しむ者であります。

しかるに一度私が私にたちかへる時、それは決して人様を笑つたり怒つたり

してはゐられぬのであります。私には一生さうしたことがないと誓はれませうか。私の妻が走らないと云ひきられませうか。いや、私が他の人妻を戀せぬと云はれませうか。いやもつと私自身をつきつめて嚴正に批判する時、人妻を見て、心が動くことはないでせうか。私のこの心のうちに、女性を見て、色情を感ずるこの心がなくならない間、刑法第百八十三條『有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス其相姦シタル者亦同シ。』この條文は存在するのであります。この嫌な法律を存在させてゐる者は、誰でもない。私の今現に有するこの、處女だとか妻だとかの差別を超にて動き出るこの心こそ、たつた一つあの法律を生み出した根本的原因であります。しかして私は遂にこの心を消滅せしめることが出來るでありませうか。若し私の心がなくならないならば、永劫に地上から、姦淫の二文字がなくなる時はないのであります。千載悲泣しても足りませぬ。

叛逆者

都會の子供たちは先づ幼稚園に學びます。十九世紀の教育學者フレーベルが獨逸において幼稚園を開いたのが初めであります。人間は先づ滿四歳になるやこのフレーベルのはじめた幼稚園に入つて、其所謂、恩物によつて教育がほどこされてあります。ついで小學校に入ります。其處では、六ヶ年教育を受けます。朝も晝も、道德を教へられ、智識が授けられ、体育をほどこされます。過古明治時代には、日本教育は其の原理を、ヘルバルトの教育學説によつて與へられました。有名なるヘルバルトの五道念、內心自由、完全、好意、正義、

衡平、其五道念に裏附けられたる主知説によつて、興味中心の教育は、日本明治時代の教育でありました。大正の今日、新理想主義のあらゆる哲學説、教育學説、倫理學説が紹介せられて、世は走馬燈のやうに多忙に、論ぜられ、實行せられ、研究されて小學教育から大學教育まで、秩序整然たる教育が行はれてゐます。人々は金の力によつて、學士となり、博士となり堂々たる大家となつてカントの哲學を論じ、東洋文明を論ずるのであります。しかし私は悲しいことながら、かゝる有樣を見て、この教育法を見て、れ暇をせねばならぬのであります。現代の教育は要するに、國家社會の椅子に腰をかける人を作る教育であり、社會の機械を作る教育だからであります。機械や椅子は決して生きた人間ではないのであります。

十八世紀に獨逸が生んだカントは、不朽の大哲學者であります。カントを捨ては、今日の全ての哲學も其立場を失ふのであります。誠にカントの思想信念は、カントの考へたことが正しい間、カントの示した教育説は我等の前にほんとの世界を表はしてくれた。理想せられたる美しい世界は我等の前に開けてゐる。彼は偉大なる哲學を揚げ、厳しい道德律の鐵鞭をふるい、永遠の世界を前途に見せて、それに至る唯一の方法を教育だと云つた。誠に教育によつてのみ時代が進むにつれて、何時かは、完成に近い人類社會が表はれ幸福なる地上を出現することが其信念であり、哲學の歸結であつた。噫。されど、私は思はず長歎息せざるを得ない。教育はそれほど大きな使命を擔ふことが出來るか。私はもう一度私にかへつて靜かに思はねばならぬ。一念私は私の内心にたちかへ

る時、誠に廣島高師の福島政雄先生と共に、この冷たき哲人の世界からに暇せねばならぬのであります。

『その深き立場から、人生を觀じ倫理を說き、遂に教育に及んで人類の將來を望んで光ある世界を描いて居る其姿はまざ〳〵と吾人の眼の前に見ねるやうに感するのである。吾人は其處に秀麗なる富嶽を仰ぐやうにも感ずるのである。併しながら吾人は其秀麗なる姿を仰ぐと共に哲人に對する吾人の淋しみを感せざるを得ないのである。哲人の姿は卓爾として吾人の眼前に聳えてゐる、吾人の前には格率の急坂があり、吾人の背には無上命法の鐵鞭が鳴り響いてゐる。吾人は既にスペンサーに背をむけて去つたものである。而して今この急坂を前に仰いでゐるのである。吾人は如何にもしてその急坂を攀ぢ登らねばならぬ。しかも、此の時既に、吾人の心の中には、力强き叛逆者が現はれて居るのである……。』

噫。この私の心中に出沒する、叛逆者、王陽明の所謂『心中の賊』善導の所謂『群賊惡獸』、この永遠に亡びない叛逆者こそ、全ての哲學をも、道德をも、木葉微塵に粉碎するではないか。あはれ、十數年の教育も數千冊の讀書も、あらゆる記憶されたる概念も、一度我が心中に、この一群賊が頭をもたげた時、一切が權威を失つて、其處には、暗黑の世界が血みどろに震されるではないか。あゝあの冷たき監獄の鐵壁も、私のこの叛逆者故に造られてあるのだ。煩鎖なる法律の條文もこの複雜なる我が心中の賊を縛る捕繩にすぎないのだ。教育も此處に權威を失ひ、哲學も此處に唯一片の概念となりはるのである。

永遠の戰場

ワシントン會議が開かれて、軍備縮小が實行されて、日本や、米國や、英國の海軍力を制限し、巨萬の富をかけた軍艦が、打沈められ、軍艦建造が自由に出來なくなつて來ました。行く〳〵は世界から戰爭といふ二文字をなくする考へでありませう。然れば、果して此地上から、血腥い戰爭がなくなるでせうか。誠に戰爭をなくしたい。數百萬の人の命と、數百億の財寶とを使つて世界を修羅場にした、あの歐洲大戰亂を終極として、否今日此頃支那に於いて行はれつゝある動亂を最後として、地上我等の子孫をして戰爭を過去の昔噺の種となさしめたい。それが果して出來るか。出來るか否かを私に問ふて見たらいい。私は又も私にかへらねばならぬ。

思ふて此處に至る時、私は又もや千載悲泣の痛ましい凡夫であります。平和を喜び、人々と共に和ぐ世界の欲しい心は人一倍強いと思ふ私の心の裏には、不思議にも、法爾自然に、爭はねばやまぬ心が動いてゐるのであります。人の小さい過失をも責め、妻や妹や親の言葉尻さへ、捕へて爭はねばやまぬ惡魔を見出すのであります。貸した金を支拂はない時一度や二度は言葉柔かに云つて見るが、遂には法廷に出て白黑を定めたい心、私の仕事に對して邪魔をする者をば、力を持つて亡ぼしたい心、私のパンを取つて食はんとする者と戰つて、私のみが生きてゆかんとする心、其の心こそ、實に、世界から戰爭をなくすることの出來ぬ原因ではないか。

噫、誠に私に此の心のある間、此處數日廣島の天地に爆音高く飛んでゐるあ

の飛行機も、遂に戰ひのために使はれるであらふ。私どもの過去において、多くの聖者、哲學者によつて、平和論は說かれた。さうしてそれが人間の理想でもあつた。しかしながら、歷史あつて三千年人の世の記錄は遂に、戰爭の歷史でしかなかつた。戰爭なくしては人生はないのか。戰ひなくしては平和もないのか。しかもこの地上から戰ひをなくしやうとすれば、私の此の心中の賊を亡ぼされる日が來ない以上、遂に永久平和の理想は、人類の唯の夢でしかないのだ。然して私は毎日この惡魔になやまされ、遂に、これを征服することに絕望したのだ。故に人類も亦遂に、この永久平和の理想を永却に棄てねばならぬのだ。

誠に、私の心中に表れ出づる戰ひの心こそ、滿洲の野に、幾萬の同胞を白骨にし、海に恐ろしい軍艦を列べ、陸に嚴しい劍戟の林を立てゝゐるのである。

全てが我一人の責任なるが故に罪惡なるが故に、世界列强の會議でも如何とも出來ぬ。法律や訓令では如何とも出來ぬ。私が私の此叛逆者を退治するより外に一生衆生の救ひはあり得ない。

慘憺たる狂態

夜の暗黑が來ると、都會は百鬼橫行の巷となる。晝のやうに明るい電燈の下亡靈のやうな、化粧の女が、生めかしい姿に、呪はれの墮落を眼の下に見せて公娼、私娼が男子の生血をすゝらふとしてゐる。私はそれを見て、絕望の吐息人類腐敗の涙をしぼらざるを得ない。常識の世界では公娼廢止運動が行はれ、私娼退治が警察の手で行はれたら、あんな嫌な女たちが救へると考へてゐる。

もつと深い反省の世界に於いては、あの痛ましい姿、あの呪はれた世相、それこそは、私の心の作つたものである。私の心を具象せられたに過ぎないのだ。思へば我一人の罪であり責任である。

活動寫眞が私をよぶ。劇場の音樂が私を誘惑する。人の世に若し、寂しさがないならば、どうして活動を見る人があらふ。劇場が立つてゐやう。若い女が人形のやうに化粧して、馬に跨つて木戸口にさらされてゐるのは曲馬團の一行である。私はそれを注視する氣になれぬ。若い女の子が、異樣なる服裝をして音樂と共に殆んど裸体に近い服を出して躍りまはる。人々は歌劇だといふ。人間は全て狂者なのだ。全てが狂人なのだ。見る者も狂人であれば、躍る者も狂人なのだ。あんなものをあんな慘憺たる狂態を平氣で見て行けるほど、否見ねば、蔑されないほど、人は狂者なのだ。しかも其恐ろしい種は何處にあるか。私のうちにこそ、それらの全てを求める心があるではないか。

永劫流轉

誠に我を裏切る者、我に叛く者は我であつた。しかも其我に叛く群賊を遂に如何ともすることが出來ないのだ。此處に我は遂に、精神的破産に陷つたのである。永劫救ふべからざる我を見たのである。

我が聖親鸞は、この悲痛なる生命破産の我を見出して、血をもつて、かの信卷に書きつけたのである。

（一）『一切の群生海、無始よりこのかた、今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして淸淨の心なし。虛假諂僞にして眞實の心なし。』

（二）『しかるに無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし。法爾として眞實の信樂なし。こゝをもつて無上の功德値遇しがたく、最勝の淨信獲得しがたし。一切凡小、一切時中に貪愛の心、つねによく善心をけがし、瞋恚の心、つねによく法藏をやく。急作急修して、頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雜毒雜修の善となづく。また虛假諂僞の行となづく。眞實の業となづけざるなり。この虛僞雜毒の善もて、無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり。』

（三）『しかるに微塵界の有情、煩惱海に流轉し生死海に漂沒して、眞實の廻向心なし。清淨の廻向心なし。』

こんな困難な文章の讀めない人のことを思ふて、これをもやすく書き替へて見ます。

（一）『あらゆる衆生は過古久遠の昔から、今日、今時に至るまで、煩惱罪惡に穢れ汚れて、少しも淸らかな心をもつておらない。うそいつはり、へつらひのこころばかりで、眞實の心がない。』

（二）『しかるに無始よりこのかた大海にもたとふべき一切衆生は、無明の暗闇の世界をさまよひ流れ、二十五有の迷ひの間を車の輪のめぐるが如くに、迷ひ歩いて、四苦八苦にしばられてやむ時がないから、眞實の信樂がない。先天的に、必然に眞實の信樂がない。だから無上の功德（六字の名號）におあひすることは出來ず、最も勝れたる淨らかな信心を獲得ことも出來ないのであ

る。全て凡夫といふ者は、微かに表はれる善心がないでもないが、常にむらがり起る貪慾愛着の煩悩をもつて其善心を汚し、ささやかな功徳は積むことはあつても、瞋り憎む煩悩の火で其功徳を焼きつくしてしまふのである。だから、頭に火のついたのをはらふが如くあせりあせつて、善根を積んでも、修行をしても、すべて毒の雑つた善と云はれ、うそ偽りの行といはれて、決して眞實の業となづけられないのである。この雑毒の善をもつてお浄土に行かうとしてもそれは出來ないことである。』

(三)『しかるに十方世界の微塵の數程の衆生は、煩悩の海にたゞよひ、生死の苦海に沈み溺れて、眞實の廻向心がない。清らかな廻向心はないのである』かうした親鸞の血の叫びは、即ち久遠劫來の暗黒を自分のうちに見出して、自分といふ者の權威も、價値も粉微塵に打碎かれた慟哭の聲である。なげ出された悲禿の姿である。この深刻なる目覺めこそは、我一人のうちに、一切衆生の罪惡に泣き、煩悩に苦しみ、暗から暗に沈んでゆく痛ましい姿を、自分のうちに見たのである。我々は此處に我のこの久遠劫來の我に目覺めて、泣かねばならぬと共に一切衆生を見て泣かざるを得ないのである。一人の罪惡に泣く姿こそは一切衆生の罪惡を自己のうちに感ずる姿である。あゝ我は一切人類と共に救はれない久遠の凡夫であり、浮ばれない永劫の衆生であることを、生死の大海、一切の群生海に見出したのである。

生命の全解放

かくして我は一切衆生と共に永劫に救はれない凡夫であり、一切の教育も教

化も役に立たないで奈落の底に沈むより外はないのであらふか。

然るに我々は此に、遂にはしなくも、偉大なる價値の轉換に遭遇したのである。見よ、我々はこの全てが打破られたどん底に、其處に如來の絶對の大慈大悲の招喚の聲に接するではないか。

誠に久遠の佛心、廻向の佛心をおいて、何處に眞實があらふぞ。そも〳〵、我々の罪惡煩惱の姿も、それが廻向されたる絶對の光明なくして、どうして見ることが出來やうぞ。

無限の生死海こそ、彼の長時永劫の佛心が、其無限の活動を表はしたまふ舞臺ではなかつたか。見よ如來は惡人正機とよびたまひ、其長時永劫の大慈悲心をば我等無邊の生死海にのみ其姿を表はしたまふのであつた。

誠に聖親鸞は、『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなきに念佛のみぞまことにておはします。』との全否定のまゝ、全肯定される念佛の世界に出でたではないか。

我等は長い間、善人たれと敎へられ、華やかなる理想の世界を見せつけられ善人たり得ると自惚れ、善人たることを好むの結果、外に賢善精進の姿をあらはしつゝ內に虛假を抱いて永遠の暗に自己を僞はらふとしたのである。

然るに我は今や、生命の全解放の世界に出でたのである。惡を惡としてなげ出し、虛假不實の我を如來の前になげ出した所、我を粉微塵に打くだかれた其端的の世界に如來の久遠の生命は惠まれてゐたのであつた。

至心、即ちまごころを我が人格のうちにたづねて、遂に得ることが出來ず、『一切群生海、無始よりこのかた乃至今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして清淨の心なし。虛假諂僞にして眞實の心なし。』との痛ましき我に當面した親鸞は『こゝをもつて如來、一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫において菩薩の行を行したまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなし眞心ならざるなし。如來の清淨の眞心をもつて圓融無碍、不可思議、不可稱、不可說の至德を成就したまへり。如來の至心をもて諸有の一切煩惱、惡業、邪智の群生海に廻施したまへり。すなはちこれ利他の眞心をあらはす。かるがゆへに疑蓋まじはることなし。この至心はすなはち、これ至德の尊號をその体とせるなり。』概念の世界、半自力半他力の世界においては、如來は如來であり

煩惱の我は我であつた。けれども眞實なる如來の勅命に直面した我等の体驗を以つてすれば永劫の衆生たる我と、一念一刹那も清淨ならざることなく眞心ならざることなき如來とは、一体であつたのだ。まことに、我と如來とはこれを切りはなせば、其處には血がながれるのであつた。切れば血の出る關係においてのみ、如來はありたまふのであつた。久遠劫來、如來は、我が生死の苦海においてのみ、不可思議兆載永劫の修行をましましたのであつた。我が煩惱成就の生死の苦海、其無邊の狂亂怒濤の大海を、眞一文字に、乘りきる大船こそは、如來の弘誓の願船であつた。見よ、幾萬噸の大船が山なす大波を難なく乘りきるが如く、如來は生死煩惱無明の大海を乘りきりたまふてあるではないか海なきところ船はない。無明煩惱のなきところ其處に如來はないのであつた。

信樂

我等は、定散自力の概念の世界に、永遠の信樂を求めて失敗し、法爾自然として、眞實の信樂なき久遠の凡夫たることに目覺めて、千載悲泣の我を如何ともすることの出來ぬのに絶望した。しかしながらこゝに全く別なる世界は與へられたのであつた。信樂とは斷じて衆生の心ではなかつたのであつた。信樂とは實に如來によつて信じられてゐることであつた。海の如き如來のみ心は一切群生海を見そなはして、一切の罪惡をお身自ら一身に內感して、無限の大慈悲をもつて長時永劫に一切衆生を捨てたまはざる、海の如き、圓融無碍滿足の信心のみ心であつた。しかも其の信じたまふみ心は、我が『一切凡小、一切時中に貪愛の心つねによく善心をけがし、瞋恚の心つねによく法財をやく。急作急修して頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雜毒雜修の善となづけ、又虛假諂僞の行となづく。眞實の業となづけざるなり。この虛假雜毒の善をもて、無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり。』この心をはなれては、如來の信じたまふみ心はなかつたのだ。』なにをもつての故に、まさしく如來、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋まじはることなきに由てなり。この心は如來の大慈悲なるが故に、かならず報土の正定の因となる。如來苦惱の群生海を悲憫して、無碍廣大の淨信をもて諸有海に廻施したまへり。これを利他眞實の信心となづく。』まことに、如來は、其金剛の淨信を無邊の凡夫衆生のために成就して、直接、この一切の粉碎されたる煩惱成就の無明海に其永劫のみ姿を表はして、我等が信念となりたまふのであつた。され

ばこそ、この他力廻向の信心こそは、佛性であり、眞實であり、如來であり、唯一絶對の無得の大道であり、利他眞實の永遠の白道であつた。まことに信樂とは、如來が生死の苦海に生きゝつて、刻々が死であるところの我等の人格を統一しつゝ進みたまふ久遠の大慈悲心であり、無限の智恵にてましましたのであつた。されば誠に、信樂とは、お身自らを、我が煩惱狂亂の無明の大海に表はしたまふたみ姿であつた。

欲生勅命

過古人類ば、幾度か、神に佛に、其至誠のこゝろを廻向して、其至誠の上に神佛の慈悲を迎へんとし、其永遠の救濟を求めんとした。否かくして其處に救ひのみ手を得たと信じ、其加護を受け得ると思つてゐた。然るに、聖親鸞は深刻なる反省のもとに、この半自力半他力の功利的信仰を批判した。さうして其處に表はれたものは、『一切の衆生には、斷じて眞實の廻向心はない。清淨の廻向心はないのだ。』といふ哀れむべき絶望の自己であつた。しかしさうした絶對絶命の境地にこそ、其處に所謂、欲生の眞意義は見出せたのであつた。誠に眞實の世界に生れんと欲ふ心こそは、それは斷じて『これ大小、凡聖、定散、自力の廻向にあらず』して、欲生はすなはち廻向心であつたのだ。まことに、欲生とは如來が一切衆生を招喚したまふ勅命であつたのだ。あゝこの欲生（かの國に生れんとねもふ心）こそ如來の勅命であつたのだ。誠に欲生とは勅命であつた。親を呼ぶ聲は、親をよばれてゐる聲であつた。如來のおよび聲は、罪惡生死のどん底に、久遠の我を抱いて泣く我のうちにとゞいてゐたのだ。其處に

聞いてゐたのであつた。

念佛

一人が救はれたとは十方衆生の救はれることである。我が救はれないでどうして十方衆生が救はれやう。

生命の全解放『善もほしからず、念佛にまさる善なきが故に、惡をもおそるべからず。念佛をさまたぐるほどの惡なきが故に。』善がほしいとて、惡をつゝむさもしい心もいらないのだ。惡がおそろしいとて、善人がほせないでもよかつたのだ。善をたのまず、惡に囚はれず、一切をなげ出した處に何の重荷があるものか。『淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし。虛假不實のわが身にて、清淨の心もさらになし。』老年に及んでもなほかくの如く、赤裸々に自己を見て泣きたまふ聖親鸞のみ心、その背景には、直ちに、眞實、清淨なる佛心が鮮かに輝きたまふてあるではないか。定散自力の相對救濟の世界や、囚はれた聖者の世界では、美しい心のおこつた時は、役にも立たふ間にもあふだらふけれども、『惡性さらにやめがたく、こゝろは蛇蝎のごとくなり、修善も雜毒なるゆへに、虛僞の行とぞなづけたる。』こんな悲痛な我を見出しては、不安なる虛飾に生きるか、ゴマカシに姿をやつすかであらふ。全てをなげ出して、やめがたき惡性を蛇蝎のやうな我を大膽になげ出して、其處に攝取の光悅に涙くむ者には、微塵の不安も、飾りも、虛僞もさうして少しの重荷もないのである。全否定されたそのまゝが、如來によつて全肯定せられて、全否定の千載悲泣の涙のまゝが、永劫消えぬ法悅となるではないか。

如來とは涅槃眞如の世界より久遠の佛心が生死大海に來りたまふたことである。如來は眞實である。慈悲であり智恵にてまします。『至心に廻向したまへり』とは如來の全体が我に來りたまふたことである。彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念佛申さんとおもひたつこゝろのおこるとき攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり』とは如來のみ心が我に來つて我を救ひたまふた姿である。『念佛申さんとおもひたつ心。』この心こそ永劫の如來の大悲が其與へんと誓ひたまひしものゝ全部を與へたまひ、求めんとしたものゝ全部を與へられた端的の救ひである。あゝこの念佛申さんとおもひたつ心、其處に、我等の全生命は解放せられ、我等出離の緣なき凡夫は、それが其のまゝ全肯定の世界に出されたのであつた。

誠に大慈大悲の如來が其永遠の姿を生死の苦海になげたまひし姿こそ、五劫兆載不可思議永劫の法藏菩薩であつた。法藏の大願業力は、罪惡生死の凡夫の心中に全的に廻向せられて、『念佛』となつたのであつた。念佛は如來の今日今時、現實の我を呼び、我を救ひ、我を攝取したまひし大獅子吼であり、勅命であり、親心の名告である。

我等は名號をたいて何れのところに久遠の佛心にふれ、救ひをきくことが出來やうか。誠に、念佛は、唯一絕對の如來のみ聲であり、如來の全部であり、私をして如來を知らしめらるる唯一の方便であつたのだ。『この至心はすなはちこれ至德の尊號をその体とせるなり。』如來の至心も名號をはなれてはない。如來の信樂も名號をはなれてはない。如來の勅命も名號をはなれてはない。救ひ

も報謝も感謝も懺悔も、一切が名號をはなれてはない。

否定の奥底に生れ出づる名號は、かくして地上唯一の如來の顯現であり、人間に最後に與へられる無碍の大道である。

『無慚無愧のこの身にて
まことのこゝろはなけれども
彌陀の廻向の御名なれば
功德は十方にみちたまふ。』（恐悲歎述懷和讃）

この和讃こそ、一應ははじらひながら眞實の慚愧なきことに慚愧しつゝ、見出すべきまことのこゝろなきまゝに、彼岸より廻向されたる功德の名號に蘇つて、若々しく生きゝりたまふた、祖聖の生活が、鮮やかにうかゞはれてゐる。

『私は今生きてゐる。』

生きてゐるが故に、喜びもすれば悲しみもする。それをそのまゝに、名號によつて生かされてゐる。

靜かに幸、不幸をほんとに味ひつゝ、しかもそれに即して名號に生かされ、幸、不幸を超ねて、ほんとうに感謝の生活が與へられる。

如來と共なる歩みは刻々の今であつて、何時も全ての打くだかれた否定の底にのみ、眞佛は名號となつて顯現したまふのである。

感想一束

藤原三千丸

□

增一阿含經護心品第十の中に

無憍甘露跡　放逸是死徑
無慢則不死　慢者則是死

『放逸は是れ死の徑』と、我は今死の徑を歩めるにはあらざるか？

□

古松の梢を通して見る蒼空、そこに星一ツ輝くあり。御佛を仰ぎ見る窓は彼處に。

□

電燈燦然たる夜の町に右往左往する人波を漸く離れ得て、フト一息すれば胸に淋しさの迫り來るあり。智恩院の石階を登る。

オ、圓光大師！

堂前に跪くべく走り寄れば、其處に我を嘲笑する物あり。人にあらず。我が額に觸れて鳴りし錢箱の鍵。

——人は財と、神とに乗ね仕ふること能はず

キリストの判然たる聲を我は心に聞きぬ。

□

某氏ピアノ獨奏會。

微妙なる音の流れに浸るべく足を運ぶ。

三等席の一隅に腰を下して耳を澄す。

嗚呼我に音樂を解する力のなきか？我は唯、ピアニスト某氏の敏速極りなき指に感嘆せしのみ。そは技術にして藝術にあらざりき。タイプライターに急しき人を見しも同然なりき。

我が生命に弦を合はする音樂は何處にありや。

□

都會人に取り卷かるゝ瓦石あり。都會人にとりてはそは物珍しきなり。されど彼等は早晩その瓦石なるに氣付くべし。

斯る都會人の一人は眞の寶石を探るべく田舍に來りぬ。

片田舍に光を求むる時は近づきつゝあり。然もその田舍の寶石も刻々に瓦石と變じつゝあるにはあらざるか。

□

一日、大阪城天主臺に登りぬ。

日本のマンチエスター、此れ大城人の誇なるか否かは知らず。西も煙、東も煙、南も煙、北も煙、煙の都。

それはよし。

されど市民の魂は煙らせたくなし。

□

人間の力は偉大にして、又小なるかな。

正信偈の話（二十）

第六章　天親菩薩

第一節　造　論

第二節　他力の一心

第三節　利　益（其ノ一）

一、現生の利益

（本文）歸入功德大寶海　必獲入大會衆數

（讀方）功德大寶海に歸入すれば　必ず大會衆の數に入るを獲。

（字　義）

『歸入』　歸依投入の意。自力のはからひを棄て、他力の信心に入ること。

『功德大寶海』　南無阿彌陀佛の名號のこと。名號の中に、一切の善根功德がみちくてかげめなきを海にたとへられたのである。

『大會衆數』　廣大會の聖衆といふこと。廣大會とは、淨土に於ける彌陀說法の會座。其會座に加はる聖者衆を大會衆といふのである。

（講　話）

□　功德大寶海

一心の信念を表はされたところに、まどひ易き繁多がこりのけられて、直ちに如來の御慈悲を領得することが出來、歸命の心が凡夫にもたやすくのみこめ

るやうになつたことは、天親論主の慈悲心であることは前號で申述べました。本號では、一心の信に入つた者の利益が述べられてあります。

南無阿彌陀佛のことを功德大寶海と申すのであります。それは丁度、大海が數知れぬ一切をふくむにも等しく、名號六字の中には、一切の善根功德がみちてゐるのであります。『一念多念證文』の中には『功德ともうすは名號なり。大寶海は、よろづの善根功德みちきはまるを海にたとへたまふ。』とあります。誠に、六字は、空漠たる單なる言語ではなくて、信念の上に與へられたる六字は、それがそのまゝ如來それ自身だからであります。名號六字の前には一切の善は、其光を失ひ、定散自力の雜毒の善は、矢張り惡として其權威を失ふのであります。

名號は如來であつて、私ではありませぬ。けれども、我ならぬものも、信ずることによつて我がものとなることは信仰上の面白いことであります。六字の功德も信ずれば、凡夫のものとなるのであります。『功德大寶海に歸入すれば』とは、『名號を信ずれば』との意を意味深くほのめかせられたのであります。海に歸すると云へば、大なるものゝ中に我を見出すやうな心が致します。光明の懷に攝取せられた溫さを思ひます。

□ 大會衆の數

大會衆の數とは、字義にも申しましたやうに、廣大會の聖衆であります。彌陀說法の會座に列る聖者たちのことであります。

名號によつて生かされてゐる人は、一念歸命の時、法爾自然の德として、正

定聚不退の位に住する身となります。それを又云ひかへますと、現身のまゝでこの淨土聖衆の仲間大會衆の數に入るとおほせられたのであります。

天親菩薩は、淨土論の中に、眞實生活をする者に與へられた五つの功德門を説きになりました。即ち一、近門。二、大會衆門。三、宅門。四、屋門。五、園林遊戯地門であります。第二門には『大會衆の數に入ることを得。』とあります。廣大會とは淨土のことであります。然るに祖聖は直ちにこれを現生の益とせられましたのは、誠に思ひきつた大膽なる信念の表白であります。既に名號を信じ、大功德をこの身に得て、有漏の穢身のまゝなれども心は常に、光明界裡にあそぶのであります。煩惱に眼をさへられて攝取の光明見ざれども、すでに念佛に生きる諸佛同等の價値の体得者であります。どうして淨土廣大の會衆たるなきを得ませう。ですから曇鸞大師は『往生論註』には『同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに、夫れ四海の内皆兄弟と爲すなり。眷族無量なり。焉んぞ、思議すべけんや』と申されました。念佛行者が其まゝに、大會衆の數であり、如來による兄弟たることを示されたのであります。

□ 必

銘文には『必はかならずといふ、かならずといふは自然といふこゝろなり。』とあります。必ずと云ひきられたところにはつきりとした信念の表白があります。かならずとは自然といふこゝろであり自然とは他力のことであります。それが決して自力によつてゞはなくて、他力自然のたはからひによつて間違ひのないことをかならずと申されたのであります。

編輯室

講演の旅

□山縣郡加計町慈光支部大會於栖心寺自十月一日夜席至六日晝席、一日午後加計町吉市の素封家猪原良右衛門氏宅へ狂風師とお邪魔に上らして戴いた。

同家は御祖母様が厚い信心の方で、愚人の人々も家庭全体が信仰中心に御生活です。御主人も今度住岡師に會はれて愈々奮立たれて求道に志されました。夜席には御參詣下され熱心に御聞き下さつた事は心強く感じられました。慈光支部は可なり團員の方が熱が上つて居ますので始めから本堂に一杯でした。二日の午後福山市の中井茂樹法兄様がわざ〳〵道路の所講演を聞きに入來して下さつた、同日の午後、早速中井法兄を案内して二度猪原様の御宅へ上りました。中井法兄様は醫師であり、猪原様は大阪高工御出身の上、東京で藥學を學んで御居でるので話がよく合つて初對面ですぐ親已になられました

今回の大會は終りの二日間位はほんとにしつくりした會で、話す者と聞かれる人とが一如の世界にとろけ合つた様でした。六日の最後の席なんか先生も私も泣き乍ら話さして頂いた位でした、午後三時頃皆様とお別れする時は誠につらい思を致しました

□山縣郡筒賀村井仁へ六日の夜から九日迄不圖さした御縁で行きました。佐々繁白道氏の宅が御宿で豫定は團員の座談會でしたが溝山御集りなので講演會になつて胡屋を會場に借りました

□賀茂郡中黒瀬村大多田光明團員主催講演會、於臺一乘氏宅、自十月十一日夜至十四日夜、講題二河白道、六日からの豫定が大多田にコレラ發生の爲め中止だつたのが九日本部に歸つて見れば十日から來いとの電報が來てゐたので、十一日晩から狂風師と歸つて講演をさして貰つた、私の部落は御法義が起きて居ない上に開けてゐませんので色々と光明團の批難が耳に這入ります。でも昔から釋迦様を初め法然上人でも親鸞聖人でも皆んな眞理を說いた人は迫害されてゐます。少し位反對があれば却つて御開山の仰せの疑謗を緣に喜べの御言葉が實際に味はれます。私の宅の會も御參りの方は熱心です。何とも申し様もなく尊い事です。今回は道管様といふ婦人の方が私の宅へ附いて御出で〻御求めになりました。この方は小さい折御両親を失はれ、色々と御不幸に會はれ且信仰も今迄隨分迷ふて居られたのが三日四夜の講演を聞かれ大へん喜んで歸られました。大變しつくりした會で毎夜三時頃迄座談が盛んでした、小學校の女先生三人共私の家に宿りがけで聞かれ、他の先生方もよく御參詣でした、私は終りの二夜は殆んど徹夜しました、日曜學校の生徒の五六名は脱落しもしない位眞劍に聞いて呉れました、十五日の朝別れる時なんか學校を遲刻して十時に出立するので見送つて呉れました。慟哭して別れを惜んでゐました

又西條驛迄上田敬一様、三好様、藤井様と私の見一乘様等が御見送り下さつた

□佐伯郡大野村大原芳太郎氏主催亡尊父七週忌記念講演會、自十月十五日夜席至十八日夜席、午後一時半頃歸開數時間休んで五時半の列車で狂風師と白道氏と三人で行きました、佐々繁様と私と代る〳〵前講を勤めさして頂いた、大原様の御家庭は御主人が非常に御熱心で、若い主人もやはり熱心な方なので今度の催しには大阪や廣島やその他へ行つて居らるる御親戚全部を御呼び集められて

ほんとに大へんでした。その上十六日の夜には私の郷里から私の兄と姉と女教員の人が二名に生徒一名とが押しかけて講演を聞きにお邪魔に行きましたのでほんとに御氣の毒でした。十八日の朝私の郷里から來た一行は佐々繁白道樣と連れ合つて歸りました

十九日に漸く夏以來の長い講演の旅を一息休ませて頂く時が來て歸廣しました。二十一日から佐伯郡に二ケ所約束出來かけてゐましたが向の郷合で延期されて、今月中は休まして貰へる事になりました。二十三日二十四日は招魂祭でしたので例年の通り佛教濟世軍が天幕傳道で御活動下さいました、二十四日の午後には一回狂風先生は濟世軍の傳道に慰撫に行かれました。この休み中も毎日數人御訪問客がございますので先生は中々お休みになるわけに參りません。然しあちこちからの遠方の方は御宿り下さいます。團員の方は遠慮なくどし〳〵御訪れ下さいませ

先日龍大教授海原眞隆先生の教行信證の御講話を拜聽さして頂きました。又夏以來久し振りに私の信ずる羽栗行道先生の御話を聞かして頂き再度御目にかからして頂きました。今日から狂風師は原稿を書かれます。各地に參りますと何處でもですが機の方がよく見ゐた同胞は少ないものです。歎異鈔の「煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、唯念佛のみぞまことにておはします」の御文の如きも前の方のなきに迄は聞き流して居る人が多い樣です。何卒自分を深く〳〵見詰めることをお氣附の程念願します。機を信ずることは奚れ〳〵も大切です。精神生活の向上の秘訣は只自分を見失はない樣に、そして念佛者は感謝と懺悔云ひかへれば、うれしはづかしの御生活に精進されんことを念じて筆を擱きます　合掌

十月二十八日本部にて　達　愚　狂

本誌定價

一冊　金拾錢
一ケ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

申込

全て前金にて半ケ年分以上御申込の時送金下さい。送金は振替を使つて下さい。

前金切れ

前金ぎれの時は「前金切」の印を押して御注意致します。二三回送金のない時は送本をやめます。特別の事情の方は其旨を云つて下さい。

大正十四年十一月十日印刷
大正十四年十一月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人

印刷人　廣島市鐵砲町四十八番地　石佛二郎

印刷所　石佛印刷所

廣島市南竹屋町五四一番地

發行所　大日本眞宗　光明團本部

振替貯金口座ヲ關貳參〇八番